

# バークリの時間論と物理学

尾崎 有紀 (Yuki Ozaki)

北海道大学大学院理学院 博士後期課程

バークリは、「観念」と「精神」の相補的な図式を核とする哲学体系を建設し、その哲学体系の中で、時間を「観念の継起」と捉えた。この時間の捉え方は、時間（そのもの）と時間の可感的尺度の区別の否定という内容を含んでいる。

こうした時間の捉え方とその内容は、バークリ哲学の基本的な構造と相まって、時間概念を抽象として批判したマッハに繋がる物理学の一つの在り方を暗示するものと思われる。とりわけ時間概念について、通常物理学では上記の時間そのものと時間の可感的尺度の区別を設けているように思われるが、この区別が誤りであると考えられる理由が物理学において間接的なものであれ存在する。すなわち、バークリの時間論に基づく物理学の時間概念の見直しが重要と思われる。しかしそうした時間論の可能性を十分吟味する上で、従来のバークリ解釈は不十分であると思われる。そこで本発表では、バークリ哲学を基礎とする物理学を展望する上で必要となる、バークリ哲学の再解釈を中心に論じる。さらに、バークリの時間論から現代物理学の時間概念のどのような批判が可能かも素描してみたい。

本発表における再解釈の要点は以下である：(1)「*esse is percipi*」という命題をバークリの哲学体系における唯一の公理として捉えること。(2)「物質否定」、*「懐疑論批判（回避）」*、「神の存在証明」を、哲学体系建設の目的や哲学体系建設に必要な仮定ではなく、公理から従う帰結として捉えること。(3)「抽象観念批判」をバークリ哲学建設の必要要件ではなく、補助的議論として捉えること。

バークリ哲学の構造を正しく把握し、さらに時間そのものと時間の可感的尺度の区別の否定という内容がバークリ哲学の必要条件であることを示すことは、「観念の継起」というバークリの時間の捉え方が物理学において有効であると認められた場合に、バークリ哲学そのものへも物理学の注意を向けさせることに資する可能性があると考えられる。